

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。  
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate  
or cite without permission.  
-----

## アジア太平洋地域における希望の人類学的研究：新たな身体実践が拓く未来

### 第6回研究会（2025年12月20日開催）報告

日時：2025年12月20日（土曜）14時～18時

場所：東京外国語大学 本郷サテライト 4F セミナールーム

内容：冒頭で代表者の深川が、研究グループの活動状況と今後の研究会計画について、報告をおこなった。

その次に、ケイトリン・コーカーにより、宮崎広和の提唱した「方法としての希望」における身体的なパフォーマンスの意義、コーカー自身が実践しているダンスやラップなどのパフォーマンスと自らの生をとりまく絶望的な言葉たち、そうした生とパフォーマンスのオートエスノグラフィを書くことの意味、そしてジェンダー差別に還元不可能な差別の交差性（インターセクショナリティ）や、それらを乗り越える近年のクィア／フェミニズム理論における「拒否」や「怒り」としての希望をテーマとする研究報告が行われた。ケイトリン・コーカーの報告の後に、参加者全員との質疑応答と全体討論をおこなった。

自身のラップやダンスなどの言語的・身体的パフォーマンスを通して、現状の「こうでしかありえない」と自然化された現実を、怒りのもとに拒否し、〈まだーない〉別様にありうる世界を立ち上げ、さらにその動きをパフォーマンス・オートエスノグラフィの形で他の人々に伝えることによって、集合的な運動に展開することを望むケイトリン・コーカーの研究発表は、個別報告に留まらず、「希望の人類学」研究会にとって、パフォーマンス・オートエスノグラフィとしての「方法としての希望」という国際的にみても斬新な観点について思考を深める貴重な機会をもたらすものであった。コーカーの発表をめぐる全体討論を通じて、メンバー全員でこれから「希望と新たな身体実践が拓く未来」について具体的な構想を築いていく一つの道筋が明らかになっただけでなく、そこでの怒りのような身体感情の意義について理解を深化させることができた。ケイトリン・コーカーの報告の概要は、下記の要旨の通りである。

（以上文責 深川宏樹）

## 報告 1 :

### 拒否としての希望を踊る

#### ーポールダンスと言葉によるパフォーマンス・オートエスノグラフィ

ケイトリン コーカー（北海道大学）

希望とは「する」ものであり、本発表ではとくにパフォーマンスに注目する。多層的な試みとして、上演したポールダンス作品としてのパフォーマンスと、本発表自体が担う言語的なパフォーマンスの両方を扱う。私は当初、身体的パフォーマンスによって言葉の支配を転覆できるのではないかと考えていた。しかし、作品の制作および上演の過程で、言葉と身体が相互に依存し支え合っていることに気づき、身体が言葉を覆すという発想は、抑圧的な制度の二項対立的な思考そのものを再生産してしまうのだと理解する。そして、ポールダンスの作品は一つのパフォーマンスとしてのオートエスノグラフィであったと言える。

オートエスノグラフィが必要であった理由の一つは、フィールドである日本に19年間暮らす中で、最も避けることができなかった問題が自分自身であったことにある。とくに、自らの立場性に固有の状況や視点は、分析から排除することができなかった。希望の人類学の研究会では、研究者の思い入れや押し付けを避けようという共通理解があるが、ここではあえて私自身の立場性から生じる思い入れに焦点を当て、そこから見えてくる日本社会、そしてその中でパフォーマンスを行うことの意味を検討する。失望のただ中にいるマイノリティ当事者からすれば、「希望があると思えること」それ自体がすでに意義を持つと述べる。次に、希望という方法を考えるために、深川の議論を通して宮崎のいう「エージェンシーの停止」を取り上げ、演劇用語のデウス・エキス・マキナとの類似を論じる。ただし、ジェンダーの問題を考えると失望ばかりが立ち現れて、このいう神（デウス）を信じられない。この失望をとらえるにあたって、ウィーグマンのいう「(その) あいだ」を参照する。私の問題はジェンダーだけにとどまらず、固有の交差性によってしばしばボヤけ、あるいは不可視化されやすい。そして、私の特有の失望が可視化されても、ウィーグマンの議論では、「(その) あいだ」(つまり私が生きている状況)において希望をどのように実践するかの手がかりが示されていない。

希望の実践を考えるにあたって、エーデルマンとシルバールームの希望論に依拠する。エーデルマンは、希望そのものが、社会が私たちを再生産する主体として管理する抑圧的制度のツールであると批判し、同性愛者の自分に貼られた悪のレッテルも希望も含めて、その言説を拒否する立場を取る。彼のいうドロップ・アウトは偶然なことにパフォーマンスに使われたラップの歌詞に書かれており、私自身も彼の主張に共感する部分が多い。しかし、「このままでは違う」と感じる自分を押し殺して現状に甘んじることには違和感がある。

その違和感を言語化してくれたのがシルバールームである。彼女は、拒否すべきなのは希望そのものではなく、むしろこの社会の現状であると論じる。この拒否の原動力となる怒りは、一般的には非合理・非生産的・無意味と見なされがちだが、ロードやアーメッドは

これと逆に、怒りは肯定的な意味でのエネルギーと情報に溢れていると論じる。私は言葉としての怒り、ラップに表れる怒りと比較し、パフォーマンスや日常の身体の中で怒りをどのように感じ、捉えられるのかを考える。そしてシルバールームは、一人の怒りや行動ではなく、たとえ失敗を含んでも、集合的に行っていくことの重要性を示す。怒りは方向性を与える力であり、最初は孤独かもしれないが、その先には仲間が集まってくれるという実感を私は得た。私たちにとってのデウス・エクス・マキナ、すなわち希望の一つの方法とは、私たちの身体を土台として生まれる言葉と身体運動の総体として立ち現れる世界、すなわちある意味でのデウス・エクス・マキナだと考える。続けることは居場所がないと感じさせる現状を拒否する、つまり希望の実践である。そして、このパフォーマンスは希望の人類学の中に居場所を持ちうると主張する。